

公開講座の開催にあたって

今日、生命の始まりへの技術的な介入は著しく進んでおり、生命の誕生は「神秘」という語だけではもはや語れなくなっています。

生命の始まりへの技術的な介入は、当事者の自己決定・自己責任に帰する問題として原則自由にすべきでしょうか。それとも、社会全体の秩序や人間の尊厳にかかわる問題として何らかの規制が必要でしょうか。

本公開講座では、卵子提供、代理出産、出生前診断、着床前診断を取り上げ、生命の始まりへの技術的な介入は今日どこまで進んでいるのか、その現状について紹介するとともに、当事者の思いや、出生をめぐる倫理的・社会的問題について、皆様と一緒に考えていきたいと思ひます。

講演の概要

堀田義太郎（東京理科大学理工学部講師）

「卵子提供をめぐる倫理的諸問題について」

卵子提供の何が倫理的に問題になるのか。卵子売買については様々な問題が指摘されている。卵子売買について指摘されている諸論点を踏まえて、精子提供とも比較しつつ、無償の提供についても考察したい。

貞岡美伸（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

「代理出産の実施をめぐる日本の現状と倫理的・社会的な問題」

長年産婦に寄り添った。妊産婦の看護を大学生に教えている。約 12 年間代理出産の是非を考察した。代理出産の医学的手順と国内外の実施状況を説明し、日本の現状から代理出産実践の問題と課題を提議する。

増田弘治（読売新聞記者／大阪大学大学院文学研究科）

「新型出生前診断。臨床研究からわかること」

2013 年春、新型出生前診断の「臨床研究」が始まった。目的は遺伝カウンセリングの質の向上だという。良質な遺伝カウンセリングの確保は、出生前診断を社会が受け入れるための大前提だ。今回の研究から、どのような事実が明らかになるのだろう。

利光恵子（立命館大学生存学研究センター客員研究員）

「日本における着床前診断をめぐる争いの現代史」

着床前診断が、いかなるパワーポリティクスのもとで、どのような論争を経て日本に導入されたのかを明らかにする。その歴史的経緯を踏まえて、不妊治療の一環としての着床前スクリーニング実施の動向について考える。